

男女共同参画標語
最優秀賞
「男女とも 歩みあわせて
輝くとりで」
宮下拓也さん 藤代南中学校(当時)

34号
平成25年11月1日発行

風



優秀賞
学生の部
「同じだね 働く力と 支える心」
「認め愛 支え愛 補い愛」
「男女の手 大きさ違えど 価値は同じ」
一般の部
「女の手男の手 合せた未来 取手から」
「役割を 担う意欲と 任せるゆとり」

市民が作る、市民のためのイベント 女と男 ともに輝く とりでの集い

毎年秋に開かれている「女と男ともに輝くとりでの集い」は、今年で17回を迎えます。男女共同参画事業の1つであるこのイベントは、市民から募った実行委員がアイデアを寄せ合い、市民団体やボランティア、市役所が連携、協力しながら実施してきた、まさに市民手作りのイベントです。17年の間、時代とともに移り変わる社会や生活環境、人々の意識に「とりでの集い」はどのように応えてきたのか。歴代の実行委員長にアンケートに答えていただき、その変化をたどってみました。

より身近な問題をより親しみやすい企画で

第1回「女と男ともに輝くとりでの集い」が開催されたのは、平成9年のことです。男女共同参画という言葉はまだ一般になじみがなく、その意味を知ってもらうことが第一の目的でした。当時の実行委員長は、「とにかく男女共同参画社会について知る機会を作りたい」という思いで、講演会、料理教室、トークセッションなど、様々な企画を実施しました。第4回ではDVD(ドメスティックバイオレンス)という扱いの難しいテーマをいち早く取り上げ、一人で悩んでいる人やこれから子育てする人、周囲の人へ向けて問題提起をしています。

その後、さらにテーマは多岐にわたたり、「子育て中のお父さん」「医療現場の女性医師」「国の取り組みと社会の仕組み」など、ここ数年は様々な視点で体験談や意見、考えを紹介しています。このように「とりでの集い」は、毎年の形やテーマを変えつつも、常に「誰もが輝ける社会」男女共同参画社会について学ぶ機会を提供してきました。

誰もが楽しめるイベントに

実行委員長として心がけたこととして最も多かったのが、「楽しむこと」。参加者だけでなく、実行委員も楽しむ。企画を練り、準備段階取りをし、参加者に喜んでもらうことが、何物にも代えがたい達成感になると言います。「苦労したことは何ですか?」の質問には、「苦労と感しなかった」「喜びが大きかった」と但し書きを付けている回答が多かったのが印象的でした。とはいえ、より多くの人に来てもらうために苦心してきたことも事実です。特に、男性と若い人の参加が少ないことは今後の課題でもあります。

社会のニーズに合わせて

啓発という目的はある程度達成した感のある「とりでの集い」ですが、アンケートにお答えいただいた実行委員長経験者の多くは、今後も継続すべきと答えています。なぜなら「少子高齢化社会を迎えた今こそ、人が互いに理解し、尊重し、協力しあう男女共同参画の考え方を浸透させる必要がある」からです。そして「とりでの集い」は、「二人一人が社会と自分の現状・未来について考え、様々な情報に触れることのできる機会」として意義のあるイベントです。

もちろん参加する側は堅苦しく考える必要はありません。気軽に参加して、楽しんで、そんな

地元を拠点に二人三脚 ~あなたの近くにもアートがある~

芸術家 傍嶋賢さん・みきさん

今回は、取手市を拠点とした活動をしている地元の若き芸術家、傍嶋賢さん・みきさんのご夫妻を取材し、日々の活動やご活躍の一端、これからの展望などをお聞きしました。取手への熱い想いを秘め、実に多彩な活動をされているお二人。いきいきとお話してくださいました。



制作に参加した映画「天心」のポスターと。

お二人は、どちらも芸術家の家庭に生まれ、芸術を身近に感じながら成長され、自然にアーティストの道を志されました。その後、東京藝大大学院を出た賢さんは、取手市にスタジオを構え、地域に密着した芸術の企画から制作まで様々な活動をされています。代表的な作品は主に絵画・壁画ですが、何でも出来る芸術家として幅広い範囲をこなしていらっしゃいます。

最近の活動の一つとしては、取手市のコマースャルビデオに二人で出演し取手市を案内する役を担われているそうです。さらには、現在公開中の映画「天心」の制作にも、お二人そろって参加されています。みきさんがエキストラとして出演されたほか、映画制作のPRにも参画しポスターやグッズ(缶バッジ)のデザイン等を担当しました。「天心」については映画に参加するまで知らない事が多かったが、今の日本芸術の礎を築いた偉人について広く知ってもらえる素晴らしい映画なので、ぜひ多くの方に見てもらいたい」とのことでした。

仕事よりは、二人でやりたい仕事をする事が多く、自分たちがやりたい事を通して、お客様に喜んでもらえることがうれし」と笑顔でお話されていました。

今後の活動については、「これからも取手市を活動の拠点として、他地域の仕事でも取手市の事例を紹介するなどして、活躍していきたい」と熱く語ってくれました。

これからも地元から発信を

取手市の男女共同参画についてお聞きすると、『取手市に住み10年以上にもなると、いろいろな行事につきあっていると、つくづく女性主体での活躍のす

中にとりこめられた「気づき」がある。そんな「集い」を目指して、時代にあった方法を取り入れつつ発展していったほしいものです。

家事や私生活も、炊事・洗濯・ペットの世話まで、二人で分担していつも一緒にやっている、とのことでした。

取手市には、東京藝大のキャンパスがあるだけではなく、市内いたる所にアートがあふれています。もちろん、藝大のみならず市民の中にもたくさんの方々が参加された「天心」は、10月から県内各地の映画館で上映中、3月には取手市民会館でも上映予定だそうです。ぜひ、足を運んでみてはいかがでしょう。(平塚)

企業訪問

男女共同参画社会を職場から

伝統を守り、地域につくす！

株式会社田中酒造店 小川せいこさん・貴由さん

今回は、創業360年の伝統ある酒造り企業を承継された女性社長と、ともに酒造りに携わっておられる旦那様のお二人に、家業を継ぐ決意、酒造りの苦労と楽しみ、今後の抱負と活躍などについてお話を聞きました。



丹精込めて作ったお酒と、笑顔のお二人。
(左：小川貴由専務 右：小川せいこ社長)

家業を継ぐ決心と まわりの支援

先代から引き継いだ当時、やってきたのは家業の事務手伝い程度で、酒造りの知識・技術にはあまり自信がなかったのだそうです。「専務(旦那様)も企業勤務でやはり酒造りは未経験、不安が一杯でした」と振り返る社長(奥様)。そんな状態の中、店

を継ぐ決心が一番大きかったのは、旦那様が一緒に酒造りをするために勤めていた会社を退社してくれたこと、そしてお義母様からの「伝統を守るこの大切さ」という支援の言葉だったそうです。「これらの支援が、不安を抱いていた自分を後押ししてくれて、やる気があれば必ずできるという強い決意に代わり、決断しました」とおっしゃっていました。

夫婦のバランス良い 役割分担が秘訣

最初の取り組みは酒造りの技術習得だったそうです。南部杜氏の方に来てもらい、夫婦で酒造りの修行からスタートしました。更に旦那様は、より技術を磨くため、県外の醸造研究機関にも通われたとのこと。

当初は夫婦共同でのスタートでしたが、次第に役割分担が出来るようになっていきました。旦那様は、メーカー勤務時代の生産管理の経験を活かして、製造を担当されています。酒造り計画を立てて、期待通りの酒ができた時の喜びはひとしおだそうです。「いかに売るかは奥様まかせ」と奥様をとても信頼しているように感じました。

老舗を守る苦労、 喜びと将来

と、社長業のほか、主に販売企画、経理を担当されています。一番うれしい瞬間は、「お買い上げ頂いたお客様からの喜びの声を頂いた時」とのことです。役割も違えばやりがいも違うようでした。そして、「時には喧嘩もするが、お互いの性格をよく知っているのだから残らない」とのことです。まさに「男女共同社会を職場から」を実践されていることが上手くいっている秘訣なのだ、と伺い知ることができました。特に子育てについては、「自営業で時間の自由がきくので、子供との接触時間は多くとれている」とのことです。自営業ならではのメリットも最大限活用されているようです。

「家業を引き継いで8年目を終えた今は、自信を持てるようになりまし」と笑顔でおっしゃるお二人。来春で創業360周年を迎える節目の年であり、これを祝うイベントとして、「楽しんで集ってもらう」をテーマに「自分ちで作ったバケツ米で醸す君萬代」イベントを推進中(初めの試みなので実験中)とのこと、忙しいながらもイキイキとお仕事をされています。

一方で、女性社長の地位については、世間的には徐々に向上してきているがまだまだ充分ではないと感じていらっしゃるそうです。しかし、「一人娘は最近では酒造りの家業を自覚し、誇りを感じている様子で、将来は家業を継いでくれたらうれしい。その頃には、女性社長の地位も今以上に向上していると期待できそう」と母親の顔になり語った。

高齢化社会を
どう生きる

シリーズ
No.22

仕事で毎日にメリハリを！ 取手市シルバー人材センター

取手市シルバー人材センターは、昭和60年の設立以来、高齢者の方々に就業機会を提供し、活力ある地域社会づくりに貢献し続けている公益社団法人です。今回は、日々活躍されている女性会員の佐谷良子さん、センター事務局長の岩澤成治さんにお話を伺いました。

大活躍の女性会員

まず、センター女性会員の佐谷さんにお話を伺いました。佐谷さんは、現在永山保育園で、平日の早朝保育と夕方の残留保育を担当しています。保育士の仕事を定年退職後、2年間の再任用を経て、センター会員に登録後も保育一筋、長年キャリアを積み上げていらした保育のプロ中のプロです。

体力が続く限り今のお仕事を続けたいとおっしゃる、子どもが大好きな佐谷さん。日々子どもにエネルギーをもらっているというだけあって、実に活き活きとしていらしたようです。

「朝、おはよう！と声を掛け合うことから一日が始まり、一緒に歌ったり笑ったり、手先を使って物を作ったり、そういつたことがとにかく楽しいですし、私自身の心身の若さと健康を保つ元

になっていきます。追いかけられたり、先生、やってーと注文されたり体力的には大変ですが、園児が私を待っていてくれると実感できることが嬉しく、やり甲斐のある仕事です。」とのこと。

佐谷さんは趣味で太鼓の会に入っているそうです。メンバーの中には、親子で保育園時代に佐谷さんの教え子だった方々もいらしたそうです。この夏は、海外遠征を果たし、遠くスペインの空に太鼓の音を轟かせていらしたようです。

仕事上つらいことは何もないそうですが、若い保育スタッフの皆さんに対しては、シルバーとしての自覚の上に、一歩距離を置いたところからアドバイスを投げかけ、出しゃばり過ぎないように気を配っていらしたそうです。また保護者とのつながりも大切にいらしています。「園

女性の力を求める シルバー人材センター

現在、取手市のシルバー人材センターは700人以上の会員を擁する団体です。ところが、センター事務局長の岩澤さんのお話によると、女性会員の割合は25%程度と低く、また、佐谷さんのような好例がある一方、女性会員の多くが希望する事務的な職種と、センターに依頼要請

のある職種とのミスマッチが多いという二重の課題を抱えているという事です。待機児童問題、社会の高齢化問題等が深刻化する昨今、センターには、女性向けの仕事としては、やはり子育てやお年寄りの家事の手伝い等のサービス要請が多く寄せられています。一方で、お年寄りや小さなお子さんのお世話に関して、有事の際に責任を取ることができない、自信がない、といった理由から、戻込みをされる女性が多くいらつしやるのも、無理からぬことかもしれません。

取手市のセンターでは、今後の対策として、県シルバー人材センター連合会と連携しての家事育児サービスに関する講習会などの実施も検討していきたいとのこと。



毎日活き活き過ごされている
佐谷良子さん

お問い合わせ：取手市シルバー人材センター 72-92888

編集後記

今回から編集メンバーになりました。うまく表現できず苦労しました。お話を伺った方の想いを確実に伝えられたか不安ですが一生懸命頑張りました。取材を通じて色々とお話を聞くなかで、私自身も大いに刺激を受けました。まだまだ自分を磨くとともに、情報誌を通じて取手を盛り上げたいたいと感じました。(土屋)

発行日 平成25年11月1日
編集発行 取手市 秘書課
編集協力員 平塚恒夫/下園淳子
沼田久美/土屋雅則
〒302-8585 取手市寺田5139
TEL 0297-74-2141
FAX 0297-73-5995
H・P http://www.city.tatebayashi.jp/
Eメール hshno@city.tatebayashi.jp/
表紙絵 有本 唯